

Yǐ dé bào yuàn

以德報怨

とくを以てうらみむく
徳を以て怨に報ゆうえだあつお
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

ある人が孔子に尋ねました。「或曰：以德報怨，何如？(Huò yuē：Yǐ dé bào yuàn, hé rú?)」(或ひと曰く、徳を以て怨に報ゆるは、何如ん)〈憲問第十四〉。徳をもって相手の怨みに報いてやるという考え方もあるが、先生はどう思われますか、と。この場合の「徳」とは、恩恵のことです。相手から怨みを受けたときに、それを怨みで返すのではなく、逆に恩恵を与えることで応えてやってはどうか、ということ。

これに対して孔子は、答える前に次のように問い返しました。「子曰：何以報徳？(Zǐ yuē：Hé yǐ bào dé?)」(子曰く、何を以てか徳に報いん)。怨みに対して徳でもって応えるということであれば、では徳に対しては何でもって応えたらいいのでしょうか、と。

そして次のように答えました。「以直報怨，以德報徳(Yǐ zhí bào yuàn, yǐ dé bào dé)」(直を以て怨に報い、徳を以て徳に報ゆ)。怨みに対しては直で応え、徳に対しては徳で応えます、と。孔子はここで「直」という言葉を使っています。直とは何か。実直、愚直、率直などの語が示すように、まっすぐな心という意味です。また、「理非曲直」という四字熟語が示すように、公正な判断という意味もあります。相手から受けた怨みに対しては、その中身を公正に判断し、自己の利害やその場の感情に左右されることなく、冷静かつ無私の心で対処することを勧めているのです。

怨みを受けるということは、必ずそれなりの理由があるはずです。その原因が相手方にある場合もあれば、自分の方にある場合もあります。冷静かつ無私の心で対処するということは、その点を明らかにするという点でもあります。

そしてまた、次のようにも言っています。「躬自厚而薄責于人，則远怨矣(Gōng zì hòu ér báo zé yú rén, zé yuǎn yuàn yǐ)」(躬自ら厚くして薄く人を責むれば、則ち怨に遠ざかる)〈衛霊公第十五〉。怨みを避けるためには、自分には厳正に、人には寛大にと心掛けるのがよい、と。自分に厳しく他人には寛大に。そんな甘い考えでは、今のこの時代は生きていけないという人もいるかもしれません。それも一理ありますが、それで生き抜ける人は他から怨まれても動じない、いわば「鈍感力」の持ち主に限られます。

それはともかくとして、話をもとに戻しましょう。「徳を以て怨に報ゆるは、何如ん」という、ある人の問いかけに、孔子は正面から答えることを避けています。何故でしょうか。

実は、これに似た言葉が『老子』という書物にも出てきます。この書物と、それを書いた老子という人物が、はたして孔子と同時代に実在したかどうかについては疑問視する向きもありますが、こういう考え方が当時あったことは明らかです。例えば支配者が民衆から怨みを受けた時、その怨みに力尽くで報復するのではなく、逆に恩恵を施すことで民衆の不満を解消した方が得策である、という考えです。これは政治手法の一つとして、あるいはあり得たかも知れません。これに対して孔子は、コトバの上からは共感しながらも、あるいはその裏に潜む欺瞞性を見抜いていたのかもしれません。

ちなみに「アメとムチで支配する」「札ビラで頬っぺたを叩く」という語が示すように、これは時として今でも通用する政治手法です。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)